

時	論
新	論
理	想 論

思い出よ、思い出よ、私の思い出よ

佐藤 浩司

(さとう こうじ)

本館文化資源研究センター

積み重なる歳月

私は東京で生まれ育った。けれど、今故郷にもどつても自分の慣れ親しんだ景観はもうそこにはない。遊び場だった空き地には見知らぬ人たちが住み、勝手知ったる家はマンションに変わっている。それは時代のながれ、自分が齢を重ねたというだけではないか。かれこれ二〇年ぶりにインドネシアの調査地を再訪するまでは、なんの不思議もなくそう思っていた。

村には巨大なパラボラアンテナが目立つようになっていたが、昔の集落景観は何ひとつ変わっていなかった。ふらふらと村の敷地にふみ込んだ私は、自分の名前を呼ばれて立ち止まった。まるで二〇年という歳月はここに存在しなかったかのように。声の主は当時小学生、私は村の子どもたちを案内役によく森の写真を撮りに行ったのである。その彼も二児の父親になっていた。

歳月は消え去り置き換わるものではなく積み重なるものだ。それはこの国の経済政策の失敗もたらした貧困の結果にすぎないのかもしれない。もしそうだとすると、個人の思い出よりも社会の論理を優先させねばならない理由はいつたどこにあるのだろうか？手をこまねいてこの現実を受け入れることしか私になすすべはないのか。

津波被害を受けたアチエの村では、その変わり果てた景観に私は打ちのめされることになった。かつて実測調査した家はもちろん、海岸沿いに開けていた村は跡形もなくなくなり、瓦礫の残る荒地に復興住宅がぼつりぼつりと建ちはじめていた。村人の運たぐしさの証などではない。多くは津波後に村外からやって来た者たちだった。三〇〇人以上いた村人のうち生き残ったのはわずか七人。お世話になった家族の所在を捜していた私を迎えてくれたのは、たまたま村を離れていて助かった女性だった。私はこの村の在りし日の姿を知っている。ただそれだけの理由で、私は被災者である彼女から十分すぎる歓待を受けた。

私がほかならぬ私であるという確信はいかに脆もろい基盤の上に成り立っているか。



津波は、人命はおろか村にあることごとくの物を奪い去る。写真さえ残さず(2007年)

とか。私の生きた場所、私を知る人、それらの存在なしに、私はどうして私であり続けるだろう。

精神文化の復権

ある人間が一生のあいだに経験する内容をすべて電子的な記録にとどめることは技術的に可能なのだという。それに近いことを実践している現代の冒険家さえいる。そんな試みにいったいどんな意味があるのかと私だって思う。八〇年分の他人の映像を見ていたら自分の人生が終わってしまう。けれども、こうした技術の行き着く先は間違いなく人間の価値観や死生観を変えてゆくだろう。いったい私たちの信じる知識や歴史とは何なのか？生き甲斐や社会はどうなのか？

インターネット上では個人のブログが流行し、電車のなかではみな一心不乱に携帯電話に向かっていている。これは仮想現実などではない。かつて民族誌には物質文化と精神文化という二大分類項目があった。精神文化のほうは、迷信として退けられ、宗教に取り込まれてしまった。現代社会に生きる私たちは精神文化とよぶべき対象を長いこと見失ってきたのだ。そして今、パソコンや携帯電話の画面の先に現代人が覗いている世界…、それは、まぎれもない精神文化の復権の兆しなのだと思う。